ビルマ（ミャンマー）への「国際協力」～バルーチャウン水力発電所のとらえ方

特定非営利活動法人メコン・ウォッチ/ビルマ情報ネットワーク
秋元由紀

（1）バルーチャウン水力発電所とは？

・ビルマ初の大型水力発電所。1960 年に第一段階が完成。現在もヤンゴンなどに送電

・大規模。第 1・第 2 発電所、2 つのダム、貯水池、送電線が複数の州にまたがる

・現地の住民は「少数民族」。周辺は反政府武装勢力の活動域

➢ 反政府勢力にとって発電所や送電塔は攻撃の対象　→　発電所関連施設は国軍が厳重に警備。対人地雷の埋設も

（2）「日本とミャンマーの関係を象徴する案件」

・第 2 発電所は戦後賠償資金で建設。その後も無償資金協力により増強や補修
・第 1 発電所も 1982 年の円借款で建設
・ビルマ初の大型水力発電所。ヤンゴン、マンダレーに送電。今でも主要電力供給源の一つ

（3）建設・維持による現地住民への影響～「桃源郷」が地雷原に

・貯水池（ダム湖）による田畑等の水没、補償なしでの移転（これまでに推定 1 万人以上）
・地域の軍事化による強制移住や強制労働
・「警備」のための対人地雷による被害（後述）
・しかも電気は来ない

➢ 伊藤博一『トングー・ロード』（岩波新書、1963）より：

「山ばかり見てきた私たちには、わが眼を疑いたくなるほど広い田圃が一面にひらけている。悠々と遊ぶ水牛 や牛の幾群れ。…時の流れが静止したかと思われる静かさ。…まさに桃源郷的な美しさと平和のただよう盆地である…食後、風に乗って夕べの讃美歌が聞こえてくる。久しぶりに私たちは人間の住む世界にたちもどってきたのだ」
　→しかし 70 年代以降、ヤドウ周辺に地雷埋設。多数の一般住民や、家畜が犠牲に

➢ 強制労働や対人地雷による被害などについては JICA も確認している。
独立行政法人国際協力機構（JICA）「ミャンマー連邦共和国バルーチャン第二水力発電所補修計画準備調査(1)調査報告書」（2012 年 4 月）表 7-4（周辺住民からのヒアリング内容）より：

<u>地雷による被害</u>
-「鉄塔周辺に地雷が埋められていることは知っているので、近付かないようにしている。」

-「1990 年、村から 1mile の地点にある送電鉄塔の外にある地雷で事故にあい、怪我をした（男性）。十分な治療を受けられなかったため、今でも寒い時期などには痛む。1990 年には村人 3 名が、1999 年には 1 名が地雷によって亡くなっている。」
-「2007 年に当時 14～15 歳の少年が鶏を追いかけて、地雷の事故にあった。フェンスが壊れていたため。足を 2 本とも失ったが、今も村で生活している。」

強制労働その他
-「送電鉄塔のフェンス（竹）のメンテナンス（架け替え）を行っている。作業に係る時間は 1 日～1 週間程度。国軍が村長に要請し、村長が村人に指示するという仕組み。」
-「送電鉄塔のフェンス（竹）のメンテナンス（架け替え）を行っており、直近では 2012 年 1 月に実施した。村から 15 分程度のところにある鉄塔 4 本が村の担当。1 鉄塔あたり 20 名で 1 日作業をする。材料（竹）も自分たちで調達する必要があり、2～3 マイルのところにある竹林から切り出してくる。3 月末に子どもが地雷で亡くなる事故があったので、その後フェンスの状態の再チェックを指示された。」
-「4 本の鉄塔のフェンスのメンテナンスが村に割り当てられている。村で 1 名がフェンスの状態の見回りを行っている。軍が不具合を見つけた場合には、写真とともに村に補修の指示がされる。特に雨期など、村内の 16 本の配電柱の根元の土が流れてしまうことがあり、（第二電力省からの要請で）そのメンテナンス（トラックで石を運び、鉄塔の周りに敷き詰める）を行うことがある。2011 年にも 1 度、1 週間程度をかけて作業をした。」
-「バルーチャン第一発電所への導水路ができたため、農業に利用していたバルーチャン川の水量が減ったので米作をやめた。（1,000 エーカーの農地が使えなくなった）。」

（４）日本の受け止められ方～死ぬまで消えなかった祖父の怒り

➢ Pascal Khoo Thwe, *From the Land of Green Ghosts: A Burmese Odyssey* (HarperCollins, 2002) より：

「しかし最後の一撃はその後に来た。戦後、日本政府は戦時中にビルマで行った残虐行為を償うことに決めた。そしてペーコンの南東約 15 キロのところにダムを造った。私が子どもの頃にいつも想像していたローピタ滝の水力発電所に、貯めた水を送るためだった。その発電所はビルマの半分に電気を送っている。しかしペーコンには電気は来なかった。祖父や近所の住民の水田や森林は貯水池に沈んでしまった。…昔からの狩猟・採集の場も破壊された。その代わり、一世帯につき 200 チャット（約 10 ドル）が補償として支払われた。戦争中に同盟していた者同士［ビルマ政府と日本政府］が戦後に新たに結託してやらかしたことについての祖父の怒りは大変なもので、死ぬまで消えなかった。『ビルマ族［ビルマの多数派民族］と日本人は戦争と破壊しかもたらさない。両方とも消してしまうのが人類のためだ』」（秋元訳）

【参考文献】
・カレンニー開発調査グループ、2006（日本語訳2009）、『ビルマ軍政下のダム開発～カレンニーの教訓、バルーチャウンからサルウィンへ』
・ビルマ河川ネットワーク（BRN）ほかプレスリリース「日本はバルーチャウン水力発電所に関連した人権侵害を調査するべき―新たな援助を検討する前に」、2011 年 11 月 2 日
・「日本政府の援助方針に反対の声　支援を検討中の水力発電所周辺に『1 万 8,000 個もの地雷』」アジアプレス、2011 年 11 月 4 日
・秋元由紀、2012、「ビルマへの ODA　バルーチャウン水力発電所の光と陰」『ワセダアジアレビュー No.12』